

第十九章 交代のドラマ

佐藤政権は、この頃が最も好調な時期であった。改定から十年を経過した日米安保条約の自動継続が波瀾なく進む見通しがたち、昭和四十五年三月十四日から大阪で開かれた万国博覧会には各国首脳が続々来日して、国内は泰平ムードにつつまれた。佐藤首相はこの年秋に予定されている総裁公選については、訪米時「(総裁選挙は)三回もやれば十分だ。自民党には(後継者は)つきつき生まれているから」ともらし、暗に四選には出馬しない意向をほのめかしていた。

しかし、その頃から公選問題は党内の関心の焦点となっていた。

佐藤首相の実兄である岸元首相は、福田蔵相が佐藤の後を継ぐのが最も適当と考え、佐藤は四選に立たず、余力を残して後継の指名権を握るべきであると考えていた。保利官房長官もこれに同調していた。一方、田中幹事長、川島副総裁は、田中政権の実現のためには、佐藤四選を推進し、佐藤政権の存続中に力をつける必要があると考えた。一方、大平は、佐藤四選を阻止すれば、田中との提携で福田路線を退け、宏池会が政治の水面に顔を出すことができるかと読んでいた。また、三木武夫は、筋論で、佐藤後の早期決戦に望みをかけていた。

このような各派の思惑の中で、沖縄返還交渉のめざましい成功がかえって佐藤に自信をつけさせ、挙党体

制による沖縄返還実現を自らの内閣で行つたため、四選を決意した。歴史の皮肉と言つべきである。田中、川島を軸とする佐藤四選工作は着実に進行し、中間派の実力者たちがいち早く四選支持を表明、中曽根康弘も同調に動きはじめた。

総裁公選の党大会はこの年（昭和四十五年）の十月二十九日に決まり、党内の大勢は「佐藤四選」でほぼ固まつたが、二年前の総裁公選のさいに挑戦した三木武夫、前尾繁三郎の二人がどういふ出方をするかが、この年の夏から初秋にかけての政界の関心の的となつた。

三木の立場は明快だつた。九月に開かれた三木派研修会で、「党内に『もの言えば損をする』という風潮があるが、いまこそ政党政治の原点に立ち戻り、自由な討論で新鮮な活力を取り戻さなければならぬ」と四選阻止の態度を表明、あくまで戦う構えをとつた。

一方、つねに総裁公選には候補者を立てることを建前としてゐる宏池会にとつて、佐藤四選問題にどう対処するかは容易ならざる問題であつた。二年前の総裁公選では前尾会長が最下位の九十五票にとどまり、派内に深刻な論議をひきおこした経緯がある。加うるに、党内には三木を除いて表むき佐藤四選に反発する空気は見られない。さらに田中幹事長は鈴木善幸総務会長を通じて、また川島副総裁は直接に前尾に接触して、それぞれ佐藤四選への協力を要請してきていた。

前尾会長は、これより先の四十五年七月六日、箱根で開かれた宏池会の青年研修会での講演で、「公害問題などの社会的アンバランスが起きているのは、民間の経済成長にくらべて公共投資が遅れているからだ。遅れを取り戻すためにも、もっと積極的な公債政策をとるべきだ」と政府の経済財政政策を批判し、「新しい酒は新しい革袋に盛らなければならぬ」と党の体質改善を強調し、佐藤政権批判を行ったが、この箱根発言の二日後、記者団の質問に答えて、「総裁選に出馬するかどうかが、何も言えない。現在いろいろと考慮中である」

と述べている。

前尾会長が「考慮」していた中身は、川島、田中らの四選派が前尾や宏池会幹部に示していた申し出であった。それは次のような構想であったと言われる。すなわち、第一は、佐藤四選後に改造人事を行う、第二は、そのさい前尾は主要閣僚として入閣する、第三は、四選後の佐藤政権では前尾派の考え方をよく反映させる、というものである。この構想は、「佐藤四選はあっても五選はないのだから、このさい事実上の副総理格として前尾が入閣し、そのあと佐藤派の協力を得て前尾政権の実現を期する」という前尾周辺および宏池会古参議員の戦略論とほぼ合致する内容であった。

大平は、大蔵省、政界を通じての先輩であり、池田の弟分であった前尾について論評することをそれまで慎重に避けていたが、この時期、新聞記者のインタビュウに答えて、珍しく「前尾論」を述べている。

「……ぼうようたる大人物、欲のない人、人格的には立派な人だ。しかし健康からいっても、また性格、性向からいっても、国民のかっさいを浴びたり、党内の多数派工作に向く人ではないね。だから天下人にはなれないかもしれない。しかし、それは彼の人格を落とすものではない」

この大平の前尾評は、彼としてはかなり正直なところであろうが、前尾がこれを読んで、愉快な気持ちになれようはずがない。そして前尾と大平の間が相変わらずこのような関係であることは、佐藤首相にとってはまことに好都合なことであった。

公選の日を一カ月ばかり後に控えた九月二十二日に佐藤・前尾会談が行われた。前尾が佐藤に四選の意思があるかどうかをただしたのに対し、佐藤は、「四選を決意するについては君の協力を求めなくてはならない。自分もやる限りは漫然と仕事はしない。君には入閣してもらうつもりだが、健康は大丈夫かね」などと述べ、暗に四選直後に改造人事を行い、前尾入閣を要請する意向を示した。

こうして、前尾は総裁選の立候補を断念し、佐藤にとって対立候補は三木武夫ひとりとなった。宏池会の

中堅・若手議員の中には、「われわれはまだまだかつて『佐藤栄作』という名前を投票用紙に書いたことがない。三選に反対しておきながら、戦略とはいえ、四選を支持するのはスジが通らぬ」という声があがったが、前尾自身に出馬の意思がない以上、前尾擁立をはかることはできない。結局、佐藤四選支持の方向が固まってしまった。

十月に入って佐藤首相は国連総会出席のためニューヨークに向かい、ついでワシントンでニクソン米大統領と会談して帰国したのち、十月二十九日の党大会における総裁公選にのぞんだ。焦点は、佐藤批判票がどれだけ出るかであったが、その結果は、投票総数四百八十一、佐藤栄作三百五十三、三木武夫百十一、ほか三、無効十四となった。党大会では、党内の批判票を集めて善戦した三木の百十一票が話題となった。

佐藤は、党大会が閉幕するさいに、川島副総裁に対して、小声で「改造は見送りましょう」と話しかけ、川島を驚かせた。この話が即座に各方面に伝わらなかつたのは、党大会の引け際であったためゴツタ返していたこと、またこのあと党大会直後に首相官邸で開かれる恒例の総裁招待パーティーに向かうため、みんなが車に乗ってしまったことなどの事情があった。

党大会が終わって真先に官邸に戻った佐藤首相は、秘書官に対して、前尾が官邸に到着したら首相執務室に招くよう指示した。間もなくやってきた前尾との会談が始まったが、佐藤が改造見送りを表明、若干のやりとりのちわずか十分間で終了した。間もなくどこからともなく、改造見送り説が伝わりはじめた。

前尾が宏池会に引き揚げ、ここではじめて佐藤・前尾会談の結論にふれ、「改造は見送りになった」と語ったため、宏池会の中堅・若手議員の間から猛烈な反発の声があがった。

これらの若手・中堅議員は、池田政権当時、政治に志して政界に登場し、宏池会にその籍を置いた人々ばかりであった。しかし、池田亡きあとの宏池会は、佐藤首相の術策にそのエネルギーを吸収されているばか

りが、もつぱら年功序列が幅をきかせ、親佐藤の幹部は陽の当たる場所に座わりつつつけていても、若手・中堅にはほとんどポストがまわってこないばかりか、発言すら十分には許されないという状況が続いていた。池田挂冠後の六年間に、大臣に起用された新人は、わずか三人という有様であった。このままでは、自分たちばかりか、宏池会そのものも政局の片隅に追いやられてしまう。それが、これらの人々のいらだちの中味であった。ただちに開かれた宏池会緊急議員総会では、まず田中六助が起って壁に掲げられている故池田前首相の写真を見上げながら言った。

「池田派が継続されていく限り、私はこの派に骨を埋めるつもりでいたが、今日という今日はカンニン袋の緒が切れた。佐藤さんが約束をホゴにしたとき、前尾さんはなぜ、同志の皆さんと相談してから」と言わなかったのか。前尾さんの役割は佐藤さんのわがままをチェックすることにある。それなのに、改造の匂い薬をかかされた上、利用するだけ利用されたのでは、もつ我慢ができない。私は前尾さんとたもとを分かち、もう二度とここへは足を踏み入れないだろう」。

田中六助は、涙をふきながらドアを開けて退席した。

その日の宏池会緊急議員総会では、田沢吉郎、服部安司、佐々木義武氏、伊東正義らが相次いで発言し、「九月二十二日の佐藤・前尾会談で事実上の政策協定を結び、同志が一致して佐藤首相に投票したのに、結果は首相に裏切られた。わが派は党役員、閣僚全員の引揚げを行うべきだ」、「前尾さんは首相にだまされたのだから、その責任をとるべきではないか。派閥も弱体化しており、体制・体質を早急に刷新する必要がある」などの意見を述べた。

宏池会内の中堅・若手の会合である木曜会のメンバーは、関係者の中で「会長室」と呼ばれていた宏池会の奥の部屋に集まり、前尾会長の責任追及、退陣要求を申し合わせる動きさえみせ、メンバーのうち十七人は「前尾退陣要求」の連判状にサインしたと伝えられた。

一方、古参議員の間からは、「これは大平系の造反、一種のクーデターではないか」という声があがった。前尾は、「事は重大なので私の進退を含め、一月以内には結論を出す」と異例の談話を発表した。

中堅・若手の不満は大平にもむかつた。彼らは大平に対し、「あなたはどう考えられようと、今度の一件はもう我慢ができない。われわれはハッキリ決着をつけるつもりだ」との意向を伝え、大平にもそれなりの決意を固めるよう求めた。大平は、「君たちの気持ちはわからんわけではないが、前尾さんには前尾さんの考えがあるだろうから、そう急かさないで……」と中堅・若手の自重を求めつつ、打開の糸口をさぐった。

大平にしてみれば、池田内閣時代には、くつわを並べるか、ないしは自分が一歩先んじていたはずの田中角栄が、佐藤政権になって幹事長 蔵相を繰り返してすっかり党内の地歩を向上させた。同時に、岸の秘蔵っ子だった福田赳夫の株も急上昇している。加うるに中曽根も力をつけ、三木も百十一票の重みを示した。それにひきかえ、自分は佐藤政権時代に政調会長、通産相の二役を歴任はしたものの、相変わらず前尾派の一幹部であるにすぎない。池田、佐藤を戦後に政界に登場した第一世代とすれば、それに次ぐ第二世代の時代はすでにはじまりつつある。あせりの生じないはずはなかったが、兄貴分の前尾を追い落とし、派閥の長の座を力で奪いとるかたちになることはどうしても避けねばならなかった。

池田勇人の写真の掲げられている宏池会の事務所でキチンと引き継ぐのでなければならぬ。それが大平の心境だった。

十一月三日頃から、前尾・大平の接触がはじまった。二人は、宏池会の結束を守る点では一致していた。前尾は、社会的に面目の立つ妥協を求めた。大平は、前尾の次のリーダーが大平であることを明確にする協定文ができれば、直ちに会長の交代を要求する意思はなかったが、前尾にとっては、後継を明示すれば、それが死に体になる瞬間であることも明らかだった。話し合いは難航したが、結局、中間措置として、集団指導制による指導体制の強化をはかるという妥協が成り、明文化はしないが、翌四十六年八月の池田元首相の

七回忌をすませたら、会長を交代してもよいという前尾の意思が、大平側に伝えられた。

この集団指導体制は十一月十八日発表された。メンバーには大平正芳を中心として鈴木善幸、小平久雄、小川平二、塩見俊二の五人が前尾を補佐することとなった。しかし、この体制はもとも妥協の産物であり、問題がそれで落着するはずがなかった。何よりも派の財政の問題があった。年の瀬が迫ってきたので、所属議員に餅代を配らなければならないが、会長を退くということがわかってきた前尾の許には、財界からの資金が集まらなくなった。前尾は個人的に金を借りてこれに充当し、会長としての面目をかるうじて保った。しかし前尾周辺には、大平を中心とする若手グループの憤懣が積み重なっていた。若手にとっての問題は、一応に次期会長は大平と決まったものの、前尾がいつ退くかはつきりしないことであった。このままでは、自分たちの政治的立場は、宏池会ごと崩壊しかねない。この気持ちをとくに募らせたのは、年末から新年にかけて、議員たちが地元に戻ったときである。統一地方選挙をこの年の春に控えて、それぞれの選挙区では、宏池会にたたかう姿勢があるのかどうか問題化した。こうした地方の空気を持ちかえった中堅・若手の間には、前尾や幹部がつきりしないのなら、大平を中心に自分たちで新たに政治集団を結成し、誰に気配をすることなく政治に全力を尽くすべきであるという空気が高まりはじめ、彼らは連日のように大平が設けていた青山の事務所が集まって、対策を検討し、大平の説得に当たるようになつてゆく。

この頃になると、宏池会内に中堅・若手への理解者は増え、衆・参両院で二十六、七名となり、他派や無派閥の同調者を入れると、四十名程度となるメドがついてきた。彼らは、「もう宏池会に恋々とする時ではない。自らの信念を実現するためには古い束縛を捨て去るべき」であると大平を説いた。

大平には、池田が作り、自分たちが苦勞して守ってきた宏池会を割って出ることには忍びないという思いと、もし割って出て田中と提携しても田中の風下に立つことになるし、下手をすれば、福田を推す勢力に勝てなくなるという不安があった。

一方、幹部と若手をつなぐ立場にあつた鈴木善幸は、一月中旬に二度、二月上旬に一度の合計三度、前尾を私邸に訪ねて、佐藤は来年は間違ひなく退陣するが、前尾にたたかう用意があるかと厳しい詰めに入つたが、前尾はついに言を左右にして明確な答えを出さなかつた。鈴木は、「ノレンに腕押しはもうごめんだ」と言つて、前尾への説得を打ち切つた。

そうこうしているうちに、若手グループは、統一地方選挙前の三月一日を旗揚げの日に設定して、大平の決断を求めてきた。大平は、これまでの政治生活で最も苦しい決断の時を迎えた。事態は、前尾の言う八月の池田の七回忌後では間に合わなくなつてゐる。何とか、前尾との話し合ひで、円満に会長交代を行う方法はないか。前尾側近と大平側近、大平と若手グループの間でぎりぎりの折衝が毎日のように続けられた。

若手の大平説得は激烈をきわめた。「グズグズしてゐては、いまのリーダーと同じだ。一体、あなたはヤル気があるのかないのか」と迫る若手と大平との間で激論がつづき、ついに大平も「もし打開の方途がないときは、君たちと行動を共にしよう」と決断した。この間、前尾は伊東ら中堅・若手グループを一人一人呼んで自重するよう求めたが、その勢いはもはや止めることができなかった。

事態に最も心を痛めたのは鈴木善幸総務会長であつた。鈴木は、ただちに大平の自重を促すとともに、造反グループの説得にとりかかり、強硬派の数人を呼び出してこう述べた。「四十年七月に池田さんの病気が再発して、再入院して手術することが決まつた七月二十九日の朝、前尾、大平と私が信濃町（池田邸）に呼ばれた。池田さんは、『もうオレの声は出なくなるかもしれない。したがつてこれが最後の声になるかもしれないから三人ともよく聞いてくれ。宏池会は保守党のバックボーンだから、これから先も結束を保つて、バックボーンにふさわしい政治行動をして行つてくれ。オレに万一のことがあつた時は、前尾君を中心にして、大平、鈴木両君は前尾君を助けてやつて行つてくれ』と言われた。私はいつもあの池田さんの『遺言』が耳にこびりつてゐる。だから、われわれ池田さんのつくつた宏池会の人間としては、いまのような状況はな

るべく早く脱却しなくてはならないと思っている。そういう観点からすれば、大平君は、宏池会で前尾に次ぐ最も重要な人物だ。大平君を生かすも殺すも、われわれ宏池会の同志がいかにか彼を守り立てて行くかではないか。しかるに君たちのやっているのは、大平君を鹿児島島の城山で討ち死した西郷さんにしてしまうようなものだ。いま一番大事なのは、前尾と大平が率直に話し合うことだが、不幸にして二人とも当事者になってしまった。幸い、私は第三者の立場にある。私が二人とよく話し合って、局面打開の方途を考えるから、諸君は早まらずに私にまかせてくれたまえ」。

強硬派も鈴木の説得に耳を傾けはじめ、問題決着にしばらくの時間をかすことを了承した。

こうして三月一日をメドとした旗揚げの日は一日延ばしになったが、この間に行われた前尾・大平会談も次第に深刻の度を加え、三月初旬には、前尾をして、「大平君もえらい。ぼくの臍腹に匕首をつきつけてきた」と言わせるような状況に入っていた。しかし、三月も十日をすぎると、前尾は会長交代を四カ月早めることについて諒承し、三月十四日、最後の前尾・大平会談が行われ、その結果、基本的な合意に達したが、地方選挙に影響を与えることを避けて、一カ月間、会長交代の合意を伏せておくことが決められた。こうして、分裂のかかった宏池会の会長交代劇は実質的に終了した。

大平はこのころ、『新権力論』という注目すべきエッセイを発表している。この論文は、その内容に当時の大平の心境が投影している点で、きわめて興味深い。

まずはじめに、『権力とは何のために必要か』が問われている。「……権力というものを考える場合にも、権力自体の構造や機能を掘り下げるだけではなくて、それを必要とするより高次のものを予定しておるものだ」という消息を心得てかかる必要があるように思われる。権力というものがそれ自体孤立してあるものではなく、権力が奉仕する何かの目的がなければならぬはずだ。権力はそれが奉仕する目的に必要な限りその

存在が許されるものであり、その目的に必要な限度において許される……」。

では、その目的は何か。大平は「平和」とか「福祉」とか言っても「その内容は必ずしも明確ではない」とし、もつと具体的で、「もつと積極的にわれわれに生きがいをもたらすようなものでなければならぬ」と言う。だが、現実になんか規定することはむずかしい。したがって「権力が考えなければならぬのは、自らのイデオロギーに同調と理解を求めることよりは、こういう（イデオロギーに）無関心な厚い層をいかに自らの存在に有益なもの、ないしは少なくとも無害なものにする工夫を通じて、自らの基礎をかためることはあるまいか」。

しかし、大平は、こういう仕事も決して容易ではなく、術策や手段にも限界があるとし、次のように記している。

「……権力にはもつと深い根元的なものがなければならぬ。東洋においては為政の根本を手段に求めず、に権力の主体の人格に求めてきた。制度や法の精緻な網に期待するよりも、主体側の徳望に求めてきた。まず己を知り、己に克ち、己を尽くすことが為政の根本であるとされてきた。その消息は、何も東洋の専売特許ではない。西洋の政治思想にもうかがわれるものである。……権力の本体は……権力者自体の自らのあり方にあるのだということは銘記すべきである。術策の分量やその組み合わせの巧拙よりも、権力主体のあつめる信望の大きさが、その権力に本當の信頼と威厳をもたらすものである。アンドレ・モーロアは『他人を支配する秘けつは、自らを支配することを体得することにある』と言っておるが、権力の主体に対する頂門の一針というべきものである」。

これを大平の前尾批判とだけ見ることは当たらない。大平は、自分自身についても自戒のむちを当てていたであろう。いずれにしても彼は権力を指呼の間に仰ぐ位置に達する時を前に、悪罵や怒号や嫉妬の中で、このような思弁を文字にしていた。権力という悪魔的なものに無自覚なまま衝き動かされるのが常とされる

政界の中では、きわめて『非凡な』または『変わった』政治家だったと言つことができるであろう。

宏池会会長交代劇の後半は、全く水面下の交渉に終始したので、前尾は、決定後、宏池会議員全員を一人ずつ呼んで意見を聞き、自分の意思を伝えた。あとにしこりを残さないようにする配慮である。突然のことで会長交代に強く反対する幹部もあつたが、前尾はこれを説得した。内部の説得が終わつて、昭和四十六年四月十七日、前尾、大平の会長交代は実現した。ここに大平は苦難の多かつた宏池会ナンバー2の座からリーダーの座に移り、いわば総裁選出馬への第一歩を踏み出すこととなつた。

前尾　大平バトンタッチの場となつたこの総会では、まず前尾会長が「伝統ある保守本流としての使命を持つわが派は、政権担当の集団としてさらに躍進を図らなければならない。新リーダーを決め、新体制を整え、私の果たしえなかつた目的達成のため前進してほしい」とあいさつし、会長を退く意向を表明した。大平は全会一致で後任の新会長に決まつたが、長老の小坂善太郎は「吞舟の魚は枝流に游がず」という吉田元首相の好んだ中国出典『列子』の言葉を引用して、「これからの宏池会は保守本流の主流を歩まなければならない」と述べた。同じく長老の福永健司は、「この交代をきつかけに、何としても昔の宏池会にかえらなければならない」と、それぞれ大平新会長を激励し、宏池会の新生に期待をかける会員の気持ちを代弁した。

大平新会長のあいさつは、長い曲折の年月のあとにしては簡明なものだった。はじめに前尾会長のこれまでの指導に謝意を表明し、前尾を宏池会の名誉会長に推薦することを提案したのち、次のように述べた。

「今回の会長交代は、宏池会にとつて、結成以来、最大の危機をはらんだものでありました。この重大な局面に処して福永、小坂両氏をはじめ幹部各位は、周到な英知と情理を傾け尽くされて、同志の間を奔走され、幸いに局面を打開することができたばかりでなく、難局を転じて結束強化の契機にまで高めることに成功したのであります。要は信を腹中においた相互信頼の強化と活発な同志間のコミュニケーションの展開を通じて、（前尾氏がいま示した）道標に向かつて、一路邁進するのみであります」。